

大学共同利用機関のアーカイブズ – I 全体報告

高岩 義信（国立大学法人 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

総研大・葉山高等研究センターのプロジェクト研究『大学共同利用機関の歴史とアーカイブズ』の中でもアーカイブズ、つまり古い文書の整理と活用をおこなう施設に関する課題を検討するサブ・プロジェクトの活動の全体報告をさせていただきます。個々の研究機関のアーカイブズのお話はそれぞれの機関の方々による発表が控えておりますので、ここでは背景的なことや共通する問題点、全体としての進捗状況についてお話しさせていただきます。

私は、現在は筑波技術大学というその近くの大学におりますが、2年ほど前まで、高エネルギー加速器研究機構（KEK）の史料室にいました。それが総研大のプロジェクトと関わり始めたいきさつです。

1. プロジェクトの背景

プロジェクトの目標

総研大は大学共同利用機関および独立行政法人に属する研究機関等を基盤研究機関として持っております。それら基盤研究機関がアーカイブズを整備することの推奨・支援を行うことが当サブ・プロジェクトの目標となっております。そして、既にアーカイブズを設置するか設置に向けて努力している研究機関とは共同研究というかたちで、よりよいアーカイブズの実現を目指しその活用を促進すること、またそれらの機関でのアーカイブズ活動を推進していくにあたり必要になってくるとされる共通の問題の一般的な考察・検討と、解決のための対策をおこなうことを目的としております。

具体的な項目としては、まず史料の収集整理の基本方針の確認があります。また、閲覧・公開など利用の促進のための課題の検討をすること、とくに所蔵史料検索の便宜のため史料目録を公開して共有化するシステムの構築を当面の大きな課題として取り上げています。そのほかにも史料不足を補う努力、たとえばオーラルヒストリーのサブ・プロジェクトとの協力などがあげられます。

第I部 本研究課題の成果報告

プロジェクトスタートまでの経過

このプロジェクト研究がスタートする以前の話から始めます。総研大・葉山教育研究交流センター（現葉山高等研究センター）で共同研究「新分野の開拓」が実施されました。その一つの課題として「大型装置の科学論」が取り上げられ、そこでSSC計画という途中で潰れてしまった高エネルギー加速器のプロジェクトに関する記録史料の収集を行いました。またそれとは独立に、日大の科学史の西尾研究室では科研費によって原子力研究所から委託された史料の調査を中心に核融合の歴史の研究が行われたのをうけ、核融合科学研究所（NIFS）で『日本における核融合研究の史料調査研究』のグループが活動を始めていました。そのグループと総研大の共同研究が交流が始まったところから研究活動に関する史料の整理の問題が共通の大きな課題として認識されるようになって来ました。

その後、葉山の教育研究交流センターでは共同研究「科学と社会」が始まり、科学と社会の関係をとらえる上で、社会学的な観点と歴史的な観点から科学の研究活動をとらえることの重要性が認識され、そのための基礎資料として研究活動の拠点である研究機関の活動を記録する史料の保存と整理が必要であることが再認識されるようになりました。同じ時期に、核融合研でもアーカイブズに関するプロジェクトも軌道に乗り始め、また、2004年度にはKEKに、当時の機構長のモチベーションと裁量によって史料室が設置されることになりました。そのころ東京大学附置の原子核研究所（核研と略す）がKEKと統合されることになって、東京の田無にあった敷地を整理することになりました。それに際して核研の史料がまとめられてつくばに移送されることになり、KEKに史料室ができてその引き受け先として認識されたことが史料室の役割が認知されたのは幸運であったと思います。また、当時KEKに滞在していたUCLAの文化人類学的科学史のTraweekさんの協力もあって、総研大、KEKおよびUCLAとの共同研究がNIFSのグループも取り込むかたちで進められるようになりました。

当然ながら総研大の基盤研究機関である大学共同利用機関は、それぞれの研究分野で研究活動の拠点としての役割が認識されています。なかでもKEKとNIFSは、高エネルギー加速器を利用する研究、プラズマ・核融合の研究の各々の分野で、日本の中心となる研究機関であることは疑いの無いことですが、そのようなところでアーカイブズ、史料整理の動きが実質的に始まっていたことがこのプロジェクト課題「共同利用研の歴史とアーカイブズ（略称）」をすすめる原動力であったと思います。

プロジェクトのスタートの頃から今年度までの経過の概要

このようにして、葉山教育交流センターのプロジェクト研究「人間と科学」の一つの課題として「共同利用研の歴史とアーカイブズ（略称）」が立ち上がることになりました。そのサブグループとしてアーカイブズの整備およびそれ自体の活動を具体的に検討するサブグループがスタートすることになりました。そこでは「アーカイブズの史料情報共有化」というタイトルで、所蔵史料の検索のためのシステムを共通のものとするを課題とするのが適当であろうということでこれを中心課題として据える

ことになります。その理由は、史料の収集・整理や管理の方法は各々の研究分野や研究機関の事情の違いもあり特色のある方法を取るであろうことが予想されますが、そのカタログ情報を検索する場合は、専門分野以外の、たとえば社会学や科学史の研究者、あるいはもっと広範な利用者がいる可能性があるため、そのような人にも容易にアクセスできる共通のシステムを提供することが必要であろうということから、史料情報の提供を共通化することを掲げることになりました。

そのような方針で進めることになった理由に、国文学研究資料館の存在が大きな影響を持っています。比較的新しく総研大の基盤研究機関になった国文学研究資料館には旧文部省史料館の史料を管理すると同時にアーカイブズの管理運営の方法を研究テーマとするアーカイブズ研究系(「史料館」)が存在します。そこで実際に日本史の歴史資料(古文書)の取扱いをした経験と、その情報を公開するシステムを構築することに取り組んできていた研究者に協力を仰ぎ、プロジェクトに参加してもらえることになりましたので、この課題の方針が具体的な方法とビジョンをともなうものとして見えてくることになりました。

この方針を基本とし、KEK および NIFS で史料室またはアーカイブズを運営してきた経験を提供することで、さらに他の基盤研究機関、大学共同利用研で史料の収集整理を推進しアーカイブズを確立していくことが支援できるようになると考えています。KEK には国際・社会連携部に史料室が設置され KE K および関連分野の歴史的資料の収集をし、NIFS には「核融合アーカイブ室」が開設されて NIFS の共同研究として核融合研究のアーカイブズを推進しています。そのようにして実際にこのプロジェクトに参加されるようになったのが、岡崎の分子科学研究所(IMS)・史料編纂室です。そこでは分子研の設立に関する史料が総研大・長倉前学長より寄贈されたことをきっかけに活動が始められました。

今年度の活動の状況を簡単に申し上げますと、数ヶ月に一回の割合で定例のミーティングを行っております。場所は KEK、分子研、核融合研、総研大と回りもちで行っています。それぞれのところで各々の機関の状況を見学・確認しあっております。その他にプロジェクトに関連のあるテーマで他機関やプロジェクトと共同して様々な研究会を開催し、いろいろな人の意見を聞く機会を設けております。これからも他のプロジェクトとの共同研究もすすめていき、色々な方の意見を取り入れていくことになると思っています。

初期の史料整理と史料記述について

KEK と NIFS でそれぞれが史料整理を始めたとき、史料の収集をどのように進めるかと同時にどのように史料情報のデータベースをつくるかということが大きな課題でした。それがベースとなって、このプロジェクトの課題である情報の共有化の課題が検討されることとなります。偶然、最初にどちらも FileMaker という商業のデータベースソフトウェアを採用しました。

初期の時点では、史料目録はどちらでも主に個別の史料(item レベルということにします)の比較的詳細な記述から始めました。いずれの場合もあとで検索をするとき

第I部 本研究課題の成果報告

に都合のいいようにするにはどうしたらよいか工夫をしています。KEKでは手元に集まった史料(最初はSSC資料)からフォーマット(テーブル)を設定して入力を始め、異なるタイプの史料の整理が必要になるにしたがい少しずつ手直した別のテーブルを用意する方法が取られました。検索のためには多くの項目(フィールド)を結合した項目を設定して利用することを考えました。それに対しNIFSではデータベースとしてどのようなテーブルが適切であるかの検討から始め、検索のためのキーワードの項目の設定に工夫がしてありその選択に準備の時間をかけてから、実際の入力を開始したと聞いています。

史料記述の国際標準

UCLAのTraweekさんから、資料の記述には情報化の時代に合った標準化が存在しているという情報を聞き、調べて見ると史料記述の国際標準にISAD(G)というものがあること、また史料記述の電子情報化の標準にEADというものがあることなどがわかり、それによれば史料の整理の基本として図書の書誌情報とは異なって史料の編成の状況を反映するような階層的な記述が必要であることなどが知識として入ってきました。さらに日本でもその国際標準を研究し取り入れる努力をしていることなどもわかってきました。あとで、その研究プロジェクトに国文学研究資料館の研究者がかかわっていたことを知ることになりました。その辺の事情の詳しいことは割愛して、あとの話に必要なことだけを言っておきます。

史料記述の特徴：ISAD(G)

ISAD(G)というのはGeneral International Standard of Archival Descriptionの略です。国際的なアーカイブズに関する組織ICAが提案していて、ISAAR(CPF) = International Archival Authority Record for Corporation Bodies, Persons, and Familiesという史料の典拠データ記述の標準とセットになったものです。これら史料記述では、なにをどのように記述しなければいけないかの標準を定めているものです。それによれば史料記述は史料の階層性による記述をする理由として次のような特徴を持っています。

- 出所原則による資料群単位の取扱い、原秩序の保存
- 整理・取扱の単位としての階層の存在：Collection、Series、Box、File、Itemなど
- 順序は上の階層から記述し把握していく。個別アイテムの記述は煩雑で時間がかかる可能性が大。(個別アイテムの詳細なデータベースから各階層ごとの状況を再現することは、原理的に可能だが全貌がわからない状況では困難をとまなう。)

このような階層性は図書のデータベースが基本的には個々の書籍の独立した書誌情報を記述すればよいこととよく対比されます。

電子符号化記述 EAD の特徴

EAD というのは Encoded Archival Description の略で、電子情報としてコード化(符号化、Encoding)するときの標準を定めています。当初、EAD はアメリカの国会図書館 LOC で推進されていました。記述の基本は ISAD(G) とおなじく階層性を記述できるようになっていて、微妙な違いはありますがその間の関係は容易につけることが出来ます。

コード化するときの標準化はそのつねとしてさまざまな計算機の環境で移行可能(ポータブル)なようにテキストファイルを標準にします。また、さまざまな機能を盛り込むためにはマークアップ言語による指定という方法が取られます。最近ではよく知られるようになったホームページ作成用の HTML がその一例です。実際は SGML というマークアップ言語の標準で仕様が定められましたが、最近 HTML より多くの機能を持った XML というマークアップ言語が世の中に出回るようになってきているので、XML の範囲で EAD が実装できるような仕様になってきています。EAD で書かれた記述を表示するには XML の採用によってにあわせることによってインターネット・ブラウザでの表示に使われるスタイルシートや XSLT による整形変換のようなテクニックを駆使できます。

アーカイブズの知識の習得

アーカイブズに関して、専門的な知識や技術があることを知るにつれて、それを学べる機会がいろいろなところで提供されていることがわかるようになりました。日本国内では国文学研究資料館がアーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)を定期的に行っています。またアメリカ・アーキビスト協会(SAA)では頻りにいろいろなテーマで講習会を開催しています。このプロジェクトのメンバーの何人かがこれらの研修会、講習会に参加して知識を習得してきています。

日本ではだんだんと国立および地方公共団体に公文書館が作られるようになり、アーカイブズに関する専門知識をもつアーキビストの需要が増えてきています。ですが日本ではアーキビストという職種が確立していません。そのような状況を反映して4年前に日本アーカイブズ学会というものを設立しましたが、設立趣意書にはアーカイブズに関する専門知識を普及発展させることに加えて、アーキビストの養成の必要性がうたわれました。今述べました標準化の研究をすすめてこられた方々もこの学会の主要なメンバーとして力を注がれています。今日もその学会の方が来られています。これからも協力していただけるように期待しています。

第I部 本研究課題の成果報告

2. 大学共同利用機関のアーカイブズ

なぜ大学共同利用機関か

全般的背景についてお話しをさせていただくという事ですので、ここで少し話を戻して、どうして大学共同利用機関のアーカイブを作っていくのかについて少し踏み込んで説明させていただきます。大学共同利用機関というのは、日本の学術研究における各分野の代表的な研究機関であることが前提としてありますので、その歴史を調べるということは日本の現代科学史あるいは学術政策・行政史に直接関わる機会になるであろうと我々は考えております。そこは国の主要な研究が企画・遂行される場であり、それが何を意味するのかと言いますと、次の3点があげられます。

- 大学共同利用機関は専門分野の研究者ソサエティのセンターになっているため、その研究機関へ行けばその分野のことが大体わかるようになっております。ここでは研究計画の企画および遂行について議論されており、またそれが集約されています。それから様々な研究計画が立てられた場合、受け皿となる研究機関を指定して予算をつけてインフラを整備することになりますと、日本の代表となる場所に設置するのが自然であると考えられます。たとえば、「すばる」は場所こそハワイにありますが、実際に企画・具体化しているのは国立天文台という日本の天文学の代表的機関です。
- 科学技術政策の実現・具体化するときの拠点となっています。
- 日本の研究分野の代表となっていることから、国際協力のような事業が開始された場合、そのセンターを拠点に話しがすすめていけると同時に、それに関する情報も集まってきます。

また、この大学共同利用機関というのを取り上げたのが総研大でした。共同研究を行っている類似の機関・施設をあげますと、大学附置の全国共同利用研究施設、最近盛んになってまいりました大学アーカイブズ（文書館等）、博物館・科学館等の施設、仁科資料館をはじめとする個人資料をもつ資料館（室）などがあります。科学史および学術行政史にかかわる歴史資料の集積をおたがいに助けあいながらすすめていければと思っております。

なぜ総研大で推進するのか

総研大は基盤研究機関に依存し密接につながりのある組織なので、プロジェクト研究で得られた成果をもとに情報共有の事業を提案するとなれば、色々な情報の中心となるハブとして機能を持ちさまざまなノウ・ハウの集中するセンターとなって、サーバー・サイトを設計するようなパイロット・プロジェクトを推進するのに適しているところであると言えます。これは、私の個人的な希望であり、総研大ではなかなかそうはすすまない事情があるかもしれません。

総研大が基盤研究機関と密接につながりのあることには別の意味もあります。大学共同利用機関法人や(一部の)独立行政法人のことを調べて研究するには、総研大は格好の位置にあると考えます。史料情報の共有化によってその可能性はより大きくなり、効率的な研究を支援することが可能になると思われます。

また、総研大が基盤研究機関に依存していることは、総研大がそれらの研究機関のセンター機能をもつというユニークな研究教育機関としての存在意義の確認とその説明責任を果たすために、総研大の本部およびセンターのアーカイブズの整備を努力してすすめていく必要もあると思われます。当然、基盤研究機関との関係などもトピックとしてあがってくるかと思しますので、基盤研究機関の歴史の研究が欠かせないものであり、そのための史料の保全に努める義務もあると思われます。ですから総研大自身のためにもまた基盤研究機関のためにも、自ら範を示してこのプロジェクト研究の推進の後押しをしていただきたいと思います。

科学史研究のためのアーカイブズ

総研大の基盤研究機関で行われているのはいわゆる理系の研究だけではありませんが、学術的なものという意味でサイエンス、つまり科学ととりあえず言うことにしますと、大学共同利用機関のような組織の歴史研究は科学史の研究と言っていいかと思えます。科学史のためのアーカイブズということから見ると、一般論として、いろいろな課題が浮上してきます。科学史を研究する観点からするとこのような研究機関のアーカイブズを一言でアーカイブズと片付けてしまうのは不十分で、2種類のもの - Scientific Archives と Institutional Archives - を区別して考えないといけなのではないかと思われます。

Scientific Archives というのは研究内容に直接かかわる歴史資料を扱うものであり、たとえば研究者個人にかかわる史料や研究・教育にかかわる機器・器具の保存史料(c.f., 博物館資料)などがあげられます。海外の例でみますと、個人史料を扱っているものに Niels Bohr Archives (Niels Bohr Institute)、Pauli Collections (CERN)、Albert Einstein Archives (イスラエルの Hebrew 大学) などがあります。日本では、仁科記念財団が仁科芳雄の史料を持っており、京都大学・基礎物理学研究所に湯川秀樹記念史料室があります。

Scientific Archives としての特徴は研究分野の研究活動の特徴に依存しますが、それはむしろ研究者のソサエティの活動記録のアーカイブズがその分析には必要なことを示しています。そのためには研究機関に付随したアーカイブズであっても研究機関とは直接かかわりのないように見える記録も視野に入れた史料の収集を心がけなければならないこととなります。その中にはある研究機関そのものとその関係する研究分野で、ある時期に重要な役割を果たし、大きな影響力を持った個人の史料が含まれます。

またアーカイブズではどのような史料が永久(長期)保存に値するか否かを判断するにはある程度の学術的な評価が要求されますので、専門分野の研究者の関与が必要になります。

第I部 本研究課題の成果報告

Institutional Archives というのは国家や地方公共団体に準ずる公的機関としての研究を支える研究機関・組織の運営にかかわる記録をアーカイブズすることです。研究機関というものはある意味で公的な組織でありますので、研究機関に関する公的な活動に関わる記録文書の史料を無視するわけにはいきません。そのような文書の保存を取り扱うということになりますと、科学者には慣れないことなのですが、そのような記録の中には、主要な会議の議事録、研究課題申請の採否、官公庁との折衝の記録や、予算の策定・執行、主要な施設・装置の契約、人事などの記録を含むものもあります。これらを全て史料室というところでアーカイブズとして扱うべきかどうかはいろいろ議論のあるところですが、これはとても重要な問題であると考えております。どういうスタンスで立ち向かっていくか、ある時点で決定しなくてはならないと思っておりますが、それが課題であることがだんだんと明らかになってきましたので、来年度にはこのプロジェクトでもっと積極的に取り組もうと考えています。日本の公的文書のアーカイブズというものはやっと何十年か前につくられた国立公文書館法に基づいて取り扱われておりますが、まだその役割が充分認識されているとは思われません。世界では公文書のアーカイブズが充実しているところが多いのですが、それに比べますと、日本では最近になって福田首相が公文書館を充実させようという話をされ、多少注目されはじめているというような段階にあります。

大学共同機関のアーカイブズというものは、まさにここに述べたような科学史研究のためのアーカイブズとして典型的なものであるということになります。この2つの情報は相補的であり、巨大科学や政策的重点研究の拠点のばあいにはとくに重要であります。

総研大のプロジェクトはそれぞれの基盤研究機関が、関連する研究活動の史料、つまり個人研究者の史料、研究のセンターに集まってくる研究者コミュニティーの活動の記録史料の収集整理を行うことを前提としています。

実を言いますと余談になりますが、資料収集に関してはいろいろな課題があります。例えば、これらの主な資料は残っているようで意外ときちんと残っていないというケースが多いです。少し前は学会が研究者のコミュニティーのセンター的役割を務めていたのですが、その学会の記録がどこに保存されているかということ、個々の活動分野の予算はほとんど用意されていなかったため、そういう資料をきちんと保存されていません。個人で記録を残されておられる方々から収集するしか方法はありません。学会の図書室にも行ったのですが、ほとんど重要なものはないというのが実情でした。

ですから、大事な歴史的資料を掘りおこすということが重要になってまいりました。常に資料提供を呼びかけたり、重要人物の資料を確保するため散逸しないように注意を喚起し、または場合によってはこちらでお預かりする旨を申し出てお願いする必要もあります。それから、文書というかたちで残っていない資料の場合、オーラルヒストリーを実施して、その記録の保存管理の方法を確立する必要があります。この場合のオーラルヒストリーは gap filling といって文書史料の隙間を埋めるものというべきもので、先ほど伊藤先生のお話にあったオーラルヒストリーとは多少ニュアンスの違う目的のものになります。

国立大学と大学共同利用機関の法人文書

Institutional Archives としての大学共同利用機関の法人文書の扱いについてコメントを付け加えておきます。国立大学法人も同様ですが、こういう機関では基本的に官公庁に準じて情報公開に関わる法律が定めてあり、法人文書の台帳を作って文書管理の手続きについての規則を定めることが義務づけられています。それによりまずと情報公開の対象となる文書の保存期間を文書の種類によって期間は違いますが定めています。保存期間が経過した後、公文書に準ずるものであれば選別ののち公文書館にアーカイブズされます。公文書館の方では、公文書館からの働きかけでこれとこれを保管してください、と言うようなことはおっしゃられないと聞きました。それぞれの機関からこれを預かってほしいと言われた場合のみ、法人文書を預かれるそうです。そこで、法人文書をアーカイブズまで見越してどうやって扱ったらよいのかというポリシーが必要なのですが、日本の官公庁にはその一般論や常識が存在していないのかと想像しています。

現実に国立大学、大学共同利用機関では、私の知る限り、別途定めるもの以外は原則廃棄と定めてあるのが普通で、どうやって別途定めるかの規定がないままになっています。最近では国立大学の主なところでこの規則を変えて大学に設置する文書館等に移管してから選別をし、そこで保管管理すると定めるところが出て来ています。大学共同利用機関もこのことを共通の課題として認識し、法人文書を現用、半現用で保存される期間、アーカイブズに永久保存という流れを統一的に扱う規則と習慣を形成する必要があると思います。このあたりのことが一般的に認められるようにする努力をしなければいけないというのが、プロジェクトのスタンスのひとつとしてあります。次年度には少し集中的にこの議論をしたい、それがこれからの課題のひとつであると考えております。

3. 史料情報共有化プロジェクト

このあとはこのプロジェクトで進めている作業の具体的な説明に入ります。

保管文書目録（Finding Aids）の公開

収集された史料は収蔵のための保管場所を確保して管理されることは当然ですが、それが活用されるためには所蔵史料のカタログ情報がデータベースとして整理されていなければなりません。さらにはそのデータベースを閲覧したり、必要な資料に行き着くための検索が出来なければ活用される機会は限定されたものになります。

アーカイブズの分野では史料の情報を記述してまとめたものを「検索手段」といいます。おそらく英語の Finding Aids という呼び名の直訳でしょう。伝統的には、文書館で所蔵史料のカタログを冊子のようなものに整理して綴じたものを用意しておいて、閲覧者が来館したときに調べたい史料があるかどうかそれを見て探して請求してもら

第I部 本研究課題の成果報告

う。そして請求のあった資料を所蔵庫から持ってきて閲覧に供するというようにしていたようです。

したがって所蔵史料にはその存在を教える「検索手段」を用意することが先ず必要になります。場合によっては、たとえば一どきに大量な記録文書が提供されたような場合、その内容を精査する時間がなくても、いつどのような経緯でその記録文書のコレクションがここにあるか、大よそどんな内容の文書がありそうかといった記述が最低必要になります。それがあれば、少なくとも閲覧者は目的毎ごとにそのコレクションを詳しく調べなければいけないものかどうか判断できることになります。

「検索手段」はアーカイブズの利用の要にあるとあっていいものです。かつては史料を所蔵しているアーカイブズに行かなければ見ることが出来ないものでしたが、印刷出版が簡単にできるようになると、遠隔地の文書館や図書館、または研究室に配布し、見るべき史料がありそうかどうか直接そのアーカイブズに赴かなくてもいいようになりました。この頃は情報技術が発達してきたので「検索手段」をネットワークからアクセスできるようにすれば印刷した冊子が手に入らなくても見ることが出来ます。また検索もページをめくるよりも楽に遂行することができます。

この「検索手段」の書き方が史料記述で、その国際標準の一つがISAD(G)であること、またEADはネットワークでアクセスするための「検索手段」の書き方の標準であるということになります。

プロジェクトの体制

基盤研究機関は自分のアーカイブズをつくるというのが基本の方針であります。総研大のプロジェクトはそれをバックアップすることです。そしてそれぞれの機関にアーカイブズ(史料室とか文書館とも呼ばれます)が出来ればその所蔵史料の「検索手段」を作成することになりますが、それを標準化されたもので用意すれば別々のアーカイブズにある史料を共通の方法で検索することが出来るはずで、実際、外国のある地域(たとえばカリフォルニア州)や組織では多くのアーカイブズが共通の標準にしたがって「検索手段」を提供することで、総合型録(ユニオンカタログ)を形成し横断検索を可能にするものが出来ています。

この総研大のプロジェクト研究では基盤研究機関のアーカイブズのユニオンカタログ化を考えていました。ところが日本の国内の多くの文書館を含めたユニオンカタログ化にすでに国文学研究資料館が取り組んでおり、その標準にEADを推進していることから、もしその標準にあわせるならば日本国内の多くのアーカイブズ(文書館等)とも共通の検索プラットフォームが使える見通しが出来てきました。それを具体的に検討しようとする作業がここで説明しようとする「史料情報共有化プロジェクト」です。

現在このプロジェクトは、いくつかの基盤研究機関の、それぞれが独自に進めてきた作業やプロジェクトの上に成り立っています。その状況は既にせつめいしていますが、それぞれがこの総研大のプロジェクトで果たす役割の観点から整理しなおして見ますと次のように整理できます。

- 既存または準備中の「アーカイブズ」が史料データベースの sample を提供し、Finding Aids を標準にしたがって作成する。
 - － 高エネルギー加速器研究機構（KEK）史料室、
 - － 核融合科学研究所（NIFS）核融合アーカイブズ室、
 - － 分子科学研究所（IMS）史料編纂室
 - － 総研大アーカイブズ（準備中）
- 史料記述の標準について知識と技術を提供、「史料情報共有化データベース」および「EAD-XML 検索システム」の枠組みの利用の便宜をはかる。
 - － 国文学研究資料館アーカイブズ関係（旧史料館）
- 「人間と科学 大学共同利用機関の歴史」の観点から全体の戦略を立てる。
 - － 総研大・葉山高等研の共同研究プロジェクト

このプロジェクトのターゲットとしては EAD 準拠の統合アーカイブズ情報サーバーの構築を考えています。そのお手本は、アメリカはカリフォルニア・デジタル・ライブラリ（CDL）の OAC (Online Archives of California) が目標になりますが、当面は国内では国文研の「史料情報共有化データベース」および「EAD-XML 検索システム」に便乗して進めることとなります。将来、総研大で独自にサーバーを運営するか、国文研のシステムを手直したまたはそれと統合して運営するかも含めて検討課題と考えています。いずれにせよ技術的な課題について方針が定めれば総研大の基盤研究機関に限定することなく研究機関や科学者の個人史料のアーカイブズのデータも統合できるようになるはずです。

国文学研究資料館「史料情報共有化データベース」

先に説明しましたように、このプロジェクトでは史料記述を国際標準に準拠したものにすることで、統合カタログのシステムを構築することを一つの目標に掲げています。しかし、その作業を進めるのに、その前提となっているアーカイブズに関する知識を持ったアーキビストを多くの文書館、史料室、アーカイブズなどで配置することは現在の日本では期待できません。そのことを考えて、国文学研究資料館では特別の入力フォームを用意して、そこにテク等なデータを入力していくことで史料の記述を完成していく仕組みを作っています。それによれば階層性を持った資料群の記述をデータベースに蓄積していくことができます。このシステム「史料情報共有化データベース」は、EAD の標準に準拠したものではなく作られましたが、すでにここには多くの文書館に所蔵する史料のデータが蓄積されています。その入力フォームにインターネットでアクセスした状態の画面の一部を第 1 図にお見せします。

第 I 部 本研究課題の成果報告

第 1 図：史料情報共有化データベース・入力支援ツール (Form) の画面の一部

この入力フォームにしたがって、すでに持っている史料情報のデータベースのデータを入力していけば、史料記述の基本データが標準に準拠した形式で表示することができますようにこのシステムはできています。核融合研 (NIFS) と高エネルギー加速器研究機構 (KEK) の史料からいくつかのコレクションをサンプルとして入力してみましたので、それが一覧に表示されていることを第 2 図に示す画面で確認して下さい。

種類	タイトル	サイズ	更新日	公開状態	資料記号	管理番号	機能
フォルダ	総合研究大学院大学東山高等研究センター	3アイテム	2007/09/16 15:10:53	公開	F2006060211080522601		編集 復元
フォルダ	高エネルギー加速器研究機構史料室	2アイテム	2007/09/16 12:42:12	公開	F2006060211135922602		編集 復元
フォルダ	京都大学地域研究統合情報センター	2アイテム	2007/09/16 12:35:00	非公開	F2007091217253633466		編集 復元
フォルダ	自然科学研究機構核融合科学研究所核融合アーカイブ室	3アイテム	2007/09/16 12:34:09	非公開	F2006060211182822603		編集 復元
フォルダ	自然科学研究機構分子科学研究所史料編纂室	8アイテム	2007/09/12 17:25:50	非公開	F2007091217233233465		編集 復元
フォルダ	復讐文書館 (実習用) NO. 2	8アイテム	2007/09/05 03:16:37	非公開	F2007051019404524313		編集 復元
フォルダ	沼津市明治史料館	112アイテム	2007/08/01 14:03:12	公開	F2007061309524924908		編集 復元
フォルダ	西山大学附属図書館	31アイテム	2007/08/01 14:00:36	公開	F2006012612572516169		編集 復元
フォルダ	神奈川私立金沢文庫	3アイテム	2007/08/01 13:58:32	公開	F2006012612531615776		編集 復元
フォルダ	神奈川私立公文書館	1813アイテム	2007/08/01 13:55:51	公開	F2006012612575816223		編集 復元
フォルダ	首都大学東京図書館センター	11アイテム	2007/08/01 13:50:23	公開	F2006012612530515760		編集 復元

第 2 図：史料情報共有化データベースのページの例 (プロトタイプ)
KEK と NIFS の史料が他のアーカイブズと並んで表示されている

EAD-XML 検索システム

「史料情報共有化データベース」は EAD を使って表示されていません。またこのシステムでは史料のコレクションレベルより下の階層の記述に対しては検索が機能しません。それを解決するためには「史料情報共有化データベース」のデータから階層構造を組み込んで EAD 化した XML ファイルに変換したものを利用することで可能になります。国文研の「史料情報共有化データベース」に入力された史料記述は、定期的に自動で EAD 化して EAD-XML ベースの検索システムに送られるようになっていきます。

この入力フォームを使う方法には一つ問題があります。「史料情報共有化データベース」の入力フォームではアイテムレベルまで一つ一つ手で入力しなければならないことです。それを解決する方法がいくつかあります。一つは EXCEL にシートに「史料情報共有化データベース」に入力したいデータを一定のフォーマットにしたがって書き込んでおけば、それを一括して「史料情報共有化データベース」に送って入力することができる方法があります。

この EAD-XML ベースの検索システムはデータがこちらに送られてしまえば「史料情報共有化データベース」と独立に働いていますので、別の方法で EAD 標準にしたがった XML ファイルが作成されれば、それをこの検索システムのサーバーにおくことで同じように検索がかけられます。そのような独立した EAD 化の仕組みが検討されています。それを使えばもとのデータベースから一括して EAD 化することが可能になります。その一つの例はもとのデータベースから抽出したデータを EXCEL のシートに並べておいて、EXCEL のマクロ機能を使って EAD 化された XML ファイルに出力する方法です。もう一つは、もとのデータベースが FileMaker であれば、FileMaker の計算フィールドという機能を使って、EAD-XML のフォーマットに整形して XML ファイルに出力する方法です。この2つの方法のどちらが効率よく処理できるかは、もとのデータベースに階層構造がどのように反映されているかによっても差が出てくると思われます。

第3図に EAD-XML 検索システムにあるデータから検索キーワードとして「高エネルギー」と「核融合」を OR で指定したときの検索結果を示します。このキーワードで検索にかかる史料が国立や地方公共団体の文書館や日本史にかかわるアーカイブズにはとてもありそうもないので、確かに総研大プロジェクトのプロトタイプとして入力したコレクションのみが表示されています。またこの結果に、それほど深くはないですが、階層構造が組み込まれていることが分かります。

この作業を進めるには、すでに持っている史料のデータベースからスタートして私たちの目的に沿うようにカスタマイズしていく必要があります。これからそれをしていく予定です。また、データベースのフォーマットが未完成であれば、この方式にマッチしたデータベースを設計し、各史料のデータを入力して史料データベースを作り上げていくことがこれから行っていかなくてはならない仕事です。

第 I 部 本研究課題の成果報告



第 3 図：史料情報共有化データベースの EAD-XML 検索結果の画面の例
史料の階層構造が見える (collection、series、item 等)

4. 今後のすすめ方と科学史研究へのインパクト

資料の利用 (閲覧) に関して

アーカイブズの所蔵資料は主として研究者が興味をもって閲覧するものであることを想定しています。そうであっても、またもっと広い範囲の利用者が潜在的にあるとすれば、資料の利用 (閲覧) に関していくつか注意しなければならないことがあると思います。たとえば、少なくとも次ぎのようなことを検討する必要があります。

- プライバシーの保護
- 資料の物理的状況の保全
- 利用の効率化
- 利用者の便宜
- 利用規則等の検討

などがあげられます。これらのことは目録だけでもインターネットのオンラインで公開するとすれば気をつけなければならないことだと思います。原則的にこれらの課題はそれぞれのアーカイブズが固有のポリシーと体制を確立していくことが必要だろうと思います。

総研大プロジェクトとしての展開

総研大としてさらに進めなければならないことは以下のようなことがあります。

- KEK、NIFS および IMS 以外の基盤研究機関でのアーカイブズの整備を促進し、そこから公開できる史料情報の提供を促進
- Scientific Archives だけでなく Institutional Archives の機能を持たせるための戦略の検討。これには事務局との協力関係を確立しながら、各種法律や規則の制限の検討。
- 基盤研究機関のアーカイブズ史料情報を公開し共有化を実施するのに適当なサーバーの検討

総研大を超えた発展

このプロジェクトが軌道に乗れば、総研大の枠にとらわれずにもっと広い範囲のアーカイブズ、史料室等にこの事業を拡大すること、広い範囲の利用者を想定して構築することが可能になると思われます。たとえば以下のような発展が有りうると思います。

まず、大学共同利用機関（基盤研究機関）以外の研究機関のアーカイブズ史料情報の整備に協力しサーバーへの情報の提供を推進します。また、国外の類似のアーカイブズとの連携をはかることなどを挙げておきます。

科学史資料の利用を促進

科学史の史料の利用の促進を図るためには、科学史研究に利用しやすい情報公開・閲覧のシステムの検討が必要でしょう。これには各種のアーカイブズを横断的に検索できるようにすること、検索サーバーから史料コンテンツ（デジタル化）の閲覧を許すことの検討などがあります。また、前項で述べた、より多くの資料館、史料室、アーカイブズなどをサーバーに登録することで、検索できる所蔵資料の目録が充実してきます。それによって、史料の所在と利用方法の情報が得やすく明瞭になります。それが実現し軌道に乗ってくれば、さらに多くの未参加のアーカイブズの登録を促すことにつながるのではないかと期待しています。

以上で、大学共同利用機関のアーカイブズ・全体からの報告を終わります。